

心 の め ば え

アヤと過ごすジイジの日記

<21>

著者／牟田 泰三
挿絵／橋本 礼子

4歳5カ月

枯れ草

暑かった夏も過ぎて、心地よい涼風が吹いてくると、お散歩でもしようかという気になってくる。晩秋の晴れた日にアヤと図書館の近くの公園までお散歩に出かけた。アヤは道ばたに咲いている小さな草花を見つけては「きれいだね」と喜んでいる。野の花を愛でるなんて、やはり女の子だなと思う。かつて息子達を育てていた頃にはこんなことはなかった。そのうち、アヤは枯れて茶色になった草花を見つけた。

「これきれいだよ」

と言って、摘んで持っている。

「それ、枯れてしまっているよ。もう生きていないんだよ」

とジイジが言っても

「でも、きれいだから持って行くの」

と言ってジイジの意見を聞こうともしない。ジイジが

「そうかなあ、どうしてきれいだと思うの」

と言うとアヤは

「工作で作ったのよりきれいに出来るよ」

と言う。はあ、そうなのか。アヤにとつて、今は、美しいかどうかが問題なのであつて、生きるかどうかの問題なのではないんだ。美しいかどうかを考えると、生きてるか枯れているかという余計なことに惑わされてはいけないんだ。幼児が美しいと言うときは、純粹に美そのものを感じているのだ。そういえば、むかし、枯れ落ち葉をジイジが踏むのを嫌がったことがあつたな。枯れた落ち葉も生きた葉っぱもアヤにとっては同じだったんだ。生きているか枯れているかで差別する理由はないんだ。



人は、美しいものを判断するとき、どんなことを基準にしているのだろうか。虹を見たり富士山を見たりすると、誰もが美しいという。これはきっと対象の色や形を素晴らしいと思つているのだろう。しかし、虹や富士山でも、それを見るときの心のありようによつては違つた見え方をするかも知れない。草花が枯れているか生きているかという大人の判断基準もこのようなものだろう。だとすると、幼児の感じ方のほうが、美に対する純粹な感じ方だともいえる。

レオナルドダヴィンチのモナリザを見て素晴らしいと感じ、ルノワールの絵を見て美しいと思うときは、単に色や形の美しさだけでなく、その内面からあふれるものや、画家の想いを感じ取つて感動している。さらに、ピカソの後半生の絵を見てどう感じるかを考えてみると、美に対するより深い理解とは何かを問われているように思われる。

幼児が抱く美への純粹な思いと、彼らが成長した後で感じる美への想いは、大きく異なるものなのだろう。

ジイジの 気付き



幼児期は美しいものを愛でる心が育つ大切な時期である。

ジイジへのお便り

エッセーを読んだ感想などを、お寄せください。
weekly@pressnet.co.jp
「このメール」係へ

プロフィール むたたいぞう 1937年、福岡県生まれ。
九州大学理学部卒業、東京大学大学院物理学専攻修了、
理学博士。京都大学助手、助教、広島大学教授、学長、福
山大学学長などを歴任。主な著書に「語り継ぎたい湯川秀
樹のこと」(丸善出版)、「電磁力学」(右波書店)、「量子力
学」(裳華房)などがある。東広島市在住。